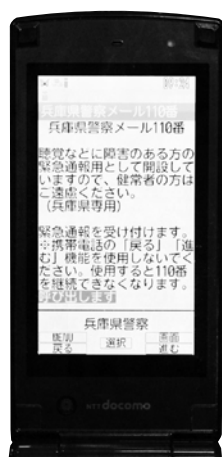


特集「障害者と携帯電話」



簡単な入力でメール110番を送信
対話画面では質問・指示を受信できます。 兵庫県警

メール110番
<http://hyogo110.jp>

★ 事件ですか？ 事故ですか？
★ 場所はどこですか？
★ けが人はいますか？
★ 内容を簡単にお願いします。

★ GPS機能付携帯電話では、通報者の位置特定が容易になります。
★ カメラ付携帯電話では、周囲の状況を写真で送れます。



目 次

特集 「障害者と携帯電話」

- ・「障害者と携帯電話」特集にあたって 1
兵庫県立福祉のまちづくり研究所 大森 清博
- ・聴覚などに障害のある方のための「メール 110 番」 2
兵庫県立福祉のまちづくり研究所 大森 清博
- ・ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた商品「らくらくホン」 4
株式会社 N T T ドコモ プロダクト部 有満 妃登美
- ・当研究所で対応を行った「携帯電話導入事例」 7
兵庫県立福祉のまちづくり研究所 中村 俊哉
- ・私と携帯電話 9
中野 篤

研究所だより

- ・ロービジョン者に配慮した夜間歩行支援のための音と光を用いた
歩行空間ユニバーサルデザインに関する研究報告 10
- ・交通事業者向けバリアフリー教育訓練研修会 12
- ・施設への派遣研修を通じて 13

アシステック掲示板

- ・コミュニケーションのバリアフリーを目指して
「コミュニケーションボード」

What's ASSISTECH?? 「アシステック」とは??

障害者や高齢者等を幅広く支援する技術という意味でアシスティブ・テクノロジーからつくった言葉です。

福祉のまちづくり研究所は、福祉のまちづくりを実現する技術的中核施設として、総合リハビリテーションセンター内に設置されています。“開かれた研究所”をめざしておりますので、ご意見や研究の参画希望などがありましたら、お気軽にお寄せください。

「障害者と携帯電話」特集にあたって

研究第一グループ 大森 清博

総務省の報道資料によると、日本国内における平成22年12月末時点の携帯電話とPHSの加入契約数の合計は1億2千万加入で、今や1人に1台、もしくはそれ以上となっています。また、機能面においても“ガラパゴス携帯”と呼ばれるほど多機能化、高機能化が進んでおり、携帯電話は多くの人にとって最も身近で強力なIT機器と言えるでしょう。

一方、携帯電話の利用に不自由を感じる障害者が数多くいます。そして、その不自由さは障害によって様々です。今回の特集では、聴覚障害者、視覚障害者、肢体不自由者の携帯電話利用にスポットを当て、どのような不自由さがあるのか、どのような取り組みが行われているのかを紹介しようと思います。

①聴覚障害者と携帯電話

「聴覚に障害のある人が電話を使うの？」と思う人もいるかもしれませんが、携帯電話にはメール機能が搭載されて（特に“写メール”が流行した2001年頃）から、聴覚障害者の間で携帯電話の普及が進んでいます。そして、これに伴い「携帯電話のメール機能を使って警察や消防局へ緊急通報したい」という新しいニーズが生まれています。本特集では、兵庫県警察が取り組んでいるメール110番を紹介します。

②視覚障害者と携帯電話

視覚に障害がある場合、通話することに問題はありませんが、携帯電話の画面が見えない／見えづらいために、アドレス帳から通話先を選んだり、メール機能を利用したりすることに困難が生じます。このため、「文字の読み上げ機能」などの支援機能を持つ携帯電話が好まれます。新潟大学の渡辺准教授の調査¹⁾では回答者の6割が「らくらくホン」シリーズを使用していると報告されています。本特集では、(株)NTTドコモ様にらくらくホンの歴史と最新機種についての紹介をお願いしました。

③肢体不自由者と携帯電話

肢体不自由の場合、携帯電話のキー操作が困難になります。さらに、発話にも不自由があれば、会話補助装置などの福祉機器との連携も必要になります。本特集では、当研究所において市販の携帯電話をそのまま使うことの困難な方に対して携帯電話の導入を行った事例と当事者の声を紹介します。

参考文献

- 1) 渡辺哲也、“視覚障がい者のパソコン・インターネット・携帯電話利用状況調査2007”（2008.3）

聴覚などに障害のある方のための「メール110番」

研究第一グループ 大森 清博

1. はじめに

兵庫県警察では、聴覚などに障害のある方からの通報に対応するため、昭和59年から F A X による通報を受け付けてきましたが、携帯電話の普及に伴い「どこからでも通報したい」というニーズに対応するため、平成16年3月1日からメール110番の運用を開始しています。今回、兵庫県内の110番通報を全て受けている警察本部通信指令課に、メール110番の特徴や通報手順などについてお話を伺いました。



図1 メール110番

2. メール110番の特徴

兵庫県警察で運用しているメール110番は、名前は「メール」となっていますが、携帯電話専用のホームページにアクセスし、必要な情報を入力して通報する方式です。この方式は、

- ・第一報を選択式で入力するので優先度の高い情報をもれ無く短時間で作成して通報できる、

- ・通常のメールと異なり、チャット方式で素早く詳細を聞き出すことができる、

といった特徴があります。また、最近のGPS機能付き携帯電話にも対応しており、通報位置を確認することができます。

なお、「誰でも通報できるように」ホームページアドレスが公開されています。

3. メール110番の通報手順

①ホームページにアクセス

<http://hyogo110.jp>にアクセスして「呼び出します」をクリックします(図2)。ただし、この段階では通報されません。素早く通報するために、ブックマークに事前に登録しておくといいでしょう。

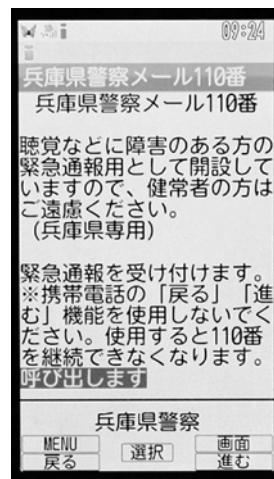


図2 通報画面

②位置情報取得、送信の確認

位置情報を送信して良いか確認し

ます。GPS機能付き携帯電話の場合、ここで現在位置を確認します。

③第一報送信

何が起こったのか、どこで起こったのか（市、町、村、目標物）、何分前に起こったのか、を入力し、「送信」ボタンをクリックして第一報を送信します。この段階で通信指令室に通報が届きます。

④第二報送信

けが人の有無、救急車が必要か、より詳細な内容、通報者の住所・氏名・電話番号・性別・生年月日、被害に遭ったのは通報者か否か、を入力し、「送信」ボタンをクリックして第二報を送信します。

⑤チャットモード

第二報送信後、自動的にチャットモードになります。256文字以内の文章や携帯電話で撮影した画像を送信できます。ただし、通信指令室からの質問や応答内容を受信するために「応答受信／返信」ボタンをクリックする必要があります。なお、質問を行っている間に、別の警察官が無線を通じて警察署やパトカーに指令して現場急行させ、事件、事故の処理に当たります。

4. 運用状況について

平成22年10月に通信指令システムが更新されたことに伴い、メール110番もリニューアルされました。これまでホームページを公開しているために誤報やいたずら通報があり

ましたが、今回、トップページに聴覚障害者のためのものであることを説明して、正しく使われるように配慮しています。

5. 取材を終えて

現在、音声通話による110番は全国で統一されていますが、残念ながらメール110番は全国の都道府県警察がそれぞれ独自にシステムを構築、運営しているため、メールアドレスやホームページが別々になっています（最近ではホームページ方式が広がりつつあるそうです）。兵庫県警察では、緊急の際には他の都道府県警察と柔軟に対応することができますが、原則として現地の警察への通報をお願いしています。

今後、さらに安全・安心な社会を実現するため、全国で共通の通報手続きを実現してほしいと感じました。

最後になりましたが、取材に快く対応いただいた兵庫県警察本部地域部通信指令課の皆さまに厚くお礼申し上げます。

参考

兵庫県警察：110番のしくみ

<http://www.police.pref.hyogo.jp/seikatu/110/index.htm>



まもりちゃんとかうへいくん

ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた商品「らくらくホン」

株式会社NTTドコモ プロダクト部 有満 妃登美

1. らくらくホンとは

「らくらくホンシリーズ」は下記のユニバーサルデザインの7原則の考え方を取り入れて開発された携帯電話で、2011年で12年目となる商品です。

＜ユニバーサルデザインの7原則＞

- 原則1：誰にでも公平に利用できること
- 原則2：使う上で自由度が高いこと
- 原則3：使い方が簡単ですぐわかること
- 原則4：必要な情報がすぐに理解できること
- 原則5：うっかりミスが危険につながらないこと
- 原則6：負担なく快適に使えること
- 原則7：誰でも使える大きさ、空間があること

開発当初、携帯電話の高機能化が進む一方、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れつつ、すべての人にとって使いやすい携帯電話を目指して、4つの基本コンセプト「しんせつ・かんたん・見やすい・あんしん」をベースとして、企画・開発された携帯電話が「らくらくホン」です。

2. らくらくホンの開発の歴史

らくらくホンは初代のらくらくホンから基本コンセプトを大切に、継承して、進化してきた携帯電話です（図1）。すべての人にとっての使いやすさを考え、特に加齢に伴う身体機能の低下に対して、各身体能力を補完する機能の積極的な取り組みを推進してきました（図2）。各機能の低下に対する配慮として取り組んできた主な項目は下記のとおりです。

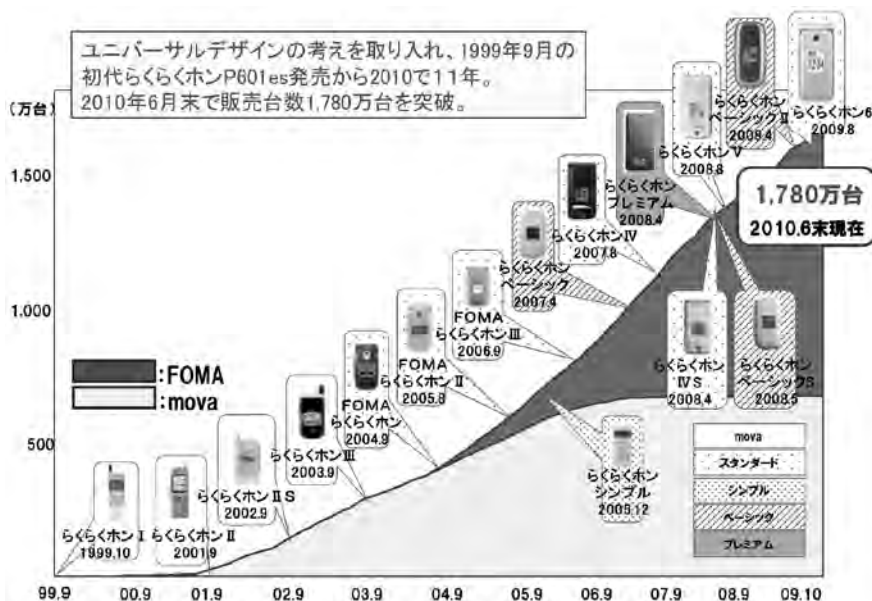


図1 「らくらくホンシリーズ」発売11年の歩み

加齢に伴って低下する運動能力や認知能力を補完する機能の取り組みを積極的に推進

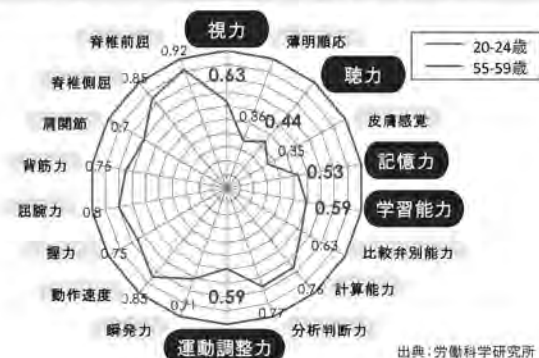


図2 加齢に伴う身体機能の低下

(1) 視力

- ・大きな文字サイズ
- ・最大 12 倍まで文字を拡大する拡大鏡
- ・見やすさにこだわったUDフォント

(2) 聴力

- ・「はっきりボイス」で受話音声を強調
- ・雑音を除去する「スーパーダブルマイク」
- ・「ゆっくりボイス」で話速を調節

(3) 記憶力 / 学習能力

- ・「おまかせカメラ」でカメラが使いやすい
- ・通話中に自局番号表示で親切
- ・次の操作がわかる「光ガイド」
- ・ケータイやITの専門用語をかんたんな言葉で説明

(4) 運動調整力

- ・健康をサポートする端末機能（歩数計、活動量計、健康機器接続やサービス連携）

また、配慮のなかで、音声サポート機能として対応した音声によって操作説明をする「音声読上げ機能」や話すことで機能や電話帳を呼び出す「音声呼び出し機

能」、音声によるメール入力支援の対応や、さらに細かな点としては、メール文章中の言葉に対して、どの漢字を用いているかを詳細に読み上げる「詳細読み上げ機能」（例；「携帯」と入力したい場合に「携帯」なのか、「形態」なのかをそれぞれ、『「携わる」のケイ、「帯」のタイ』『「形」のケイ、「態度」のタイ』と読上げること

で意味に則した漢字を選択することができる）等が、高齢者のみならず、視覚障がい者の方にとっても使いやすい機能として利用されております（図3）。

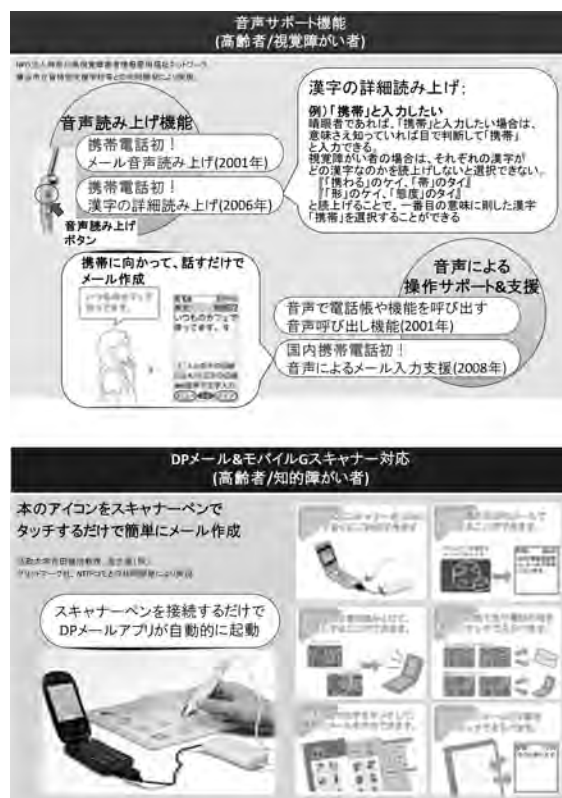


図3 らくらくホンの機能開発
(高齢者／障がい者への配慮)

各携帯電話の商品企画を実施する際、実際にご利用いただいているお客様からの申告や視覚障がい者の方々との意見交換会等での指摘事項・課題等を踏まえ、検討し、次機種では改善するよう実施し

てきました。

3. らくらくホン7の開発

実際のお客様からの声を元に開発した最新機種がらくらくホン7です。らくらくホンには下記のとおり、多くのお客様の声が寄せられています。

らくらくホンに寄せられた

お客様の声（一部）＞

- ・ 歩数計・能力ストレッチングを毎日利用しています
- ・ 基本機能が使いやすい
- ・ ディスプレイが大きくて見やすい
- ・ 操作方法がよくわからなくても、説明書を読むのは億劫
- ・ ボタンが大きくて見やすい、さらに印字された字も見やすい
- ・ 濡れても安心だから、防水対応がいい
- ・ 海外旅行に行っても、いつものように使いたい
- ・ いろいろ写真を撮りたいけど、画質がいまいち。デジカメなみにはならないの？
- ・ i コンシェルは使えないの？
- ・ デコメールを使ってみたいけど、よくわからない
- ・ ケータイでインターネットをしたいけど、どうすればいいの？

上記のようなお客様の声や実際のお客様の利用意向等を元に検討し、分析を行ったうえで、下記の商品特徴を持った携帯電話を開発しました（図4）。一方で、視覚障がい者の方々に対する新しい配慮として、下記の対応を実施しています。



図4 らくらくホン7の主な特長

- ・ i コンシェルの部分的音声読上げ対応
- ・ QRコードが簡単に読み取れる「おまかせカメラ」のQRコード自動認識機能
- ・ カメラ撮影時の指がかりをお知らせする「指がかりお知らせアラーム」
- ・ らくらくホンの操作方を教えてくれる「らくらく使い方ガイド」の音声読上げ・呼び出し対応
- ・ ワンプッシュボタンで着信応答できる機能
- ・ メール編集時に文章をコピーした際の読上げタイミングの改善
- ・ 見やすさにこだわったUDフォントの改善（弱視の方のため）

4. おわりに

今後も、らくらくホンはユニバーサルデザインの7原則を根底とした基本コンセプト「しんせつ・かんたん・見やすい・あんしん」をベースに、らくらくホンの良さは継承しつつ、実際のお客様の声に耳を傾け、改善し、進化し続けたいと考えています。

当研究所で対応を行った「携帯電話導入事例」

研究第二グループ 中村 俊哉

1. はじめに

みなさんは、携帯電話をお使いでしょうか？多くの方は携帯電話を手放せない生活をされているかと思いますがいかがですか？

では、どのような場面で携帯電話を使っていますか？メールや電話、写真や動画の撮影、ホームページの閲覧、テレビの視聴、音楽鑑賞、ナビゲーション、コンビニでの支払い…

このように現在の携帯電話は様々な機能をもっています。

また、「らくらくホン」のように使いやすさの工夫がなされたものや、スマートフォンのように、タッチパネルや音声入力などの直感的な操作、多様なアプリケーションによるカスタマイズのしやすさなど、様々な人に使いやすくなっている部分もあります。携帯電話の機能ではうまく使用できない場合、取り付け方法を工夫する、あるいは操作するために自助具などを用いて活用されている方もいます（図1）。



図1 電動車いす上での携帯電話操作
（マウススティックを使用）

しかし、重度な障害があることにより、現在の携帯電話では使えない方もまだまだいます。

携帯電話の多くは、個人が端末を直接改造することが不可能で、個々人に合わせた入力装置を取り付けることが困難な場合が多いと言えます。

2. 当研究所の取り組み（事例紹介）

当研究所では、市販の携帯電話をそのまま使うことが困難な方に数名に対し、携帯電話の導入を行いました。

その中から、今回は中野篤さんの事例を紹介します。

2.1 これまでの経緯

中野さんは、脳性麻痺のため会話は携帯型会話補助装置トーキングエイド（以下T A）を、移動は電動車いすを用いて生活をしています。手をうまく使えないため、電動車いすのジョイスティックやT Aの入力操作は足を使っています。

当初、通信機能をもつ携帯型意思伝達装置の導入を検討していましたが、評価用にレンタルしてみたところ短縮ダイヤルでの発信登録数が少ないなどいくつか使いにくい点があり、導入に至りませんでした。

2.2 ワンスイッチ携帯電話

中野さんが携帯電話で会話ができるように1スイッチで携帯電話を操作できるような装置の試作を行いました。

使用したのはN T T docomo の mova 端末です。外部入力用のコネクタに試作し

た制御装置を介してスイッチを接続、「押し」「長押し」の組み合わせで、発信先の選択・発信ができます。会話は T A を用いて行うため、T A のスピーカ付近にマイク設置、イヤホンの代わりにスピーカを取り付けました。

2.3 二画面携帯

携帯電話の試用からしばらくすると、「メールも使いたい」などの要望が上がってきました。ニーズに対応すべく検討を行っていたところ、外部入力に対応した携帯電話 FOMA D800iDS（三菱電機）が発売されました。そこで、中野さんに対し、この携帯電話の導入を行いました。

専用のアダプタを介し、外部スイッチを足元へ取り付け、T A で話しができるようにマイクやスピーカの設置、本体のディスプレイが見えやすい位置へ取り付け等を行いました（図2）。



図2 外部スイッチを用いた携帯電話の操作（通話には会話補助装置を使用）

今では、携帯電話を「手放せない」と言われるほど有効に使っていただいています。

次ページで、使用者である中野さんの声を紹介します。

なお、FOMA D800iDS は残念ながら生産中止となり、在庫のみの販売となっています。

3. まとめに変えて

携帯電話は私たちにとってもすでに生活に欠かせない道具となっています。

障害のある人にとっても携帯電話が使えることで、生活の質が上がっていくことは想像に難くないでしょう。

例えば、移動時に電動車いすが脱輪して助けを呼びたい時の緊急連絡（電話・メール）や、移動先でエレベータが壊れていたときのルート変更の検討（GPS）、車いすで入れるレストランやトイレの検索（Web・GPS）など、携帯電話で使える機能が広がれば、私たち以上に必要不可欠な道具となります。

また、現在普及しつつあるスマートフォンは多様なアプリケーションのインストールや制作による従来の携帯電話に比べ、ソフトウェアのカスタマイズがしやすい点が大きな特徴です。

今後、障害に対応したアプリケーションや入出力装置が搭載されれば、どんどん生活の質が向上していくことでしょう。

他の用具と同様に、出来ることが広がることで、自信につながり、さらなる活動へつながっていきます。

ユニバーサルデザインだけでなく、後から調整やカスタマイズができ、重度な障害にも対応可能な「アダプタブルデザイン」も今後望まれます。

私と携帯電話

中野 篤

私は、話すことができないので、トーキングエイドを使用しています。手でトーキングエイドを操作することができないので、電動車いすのフットサポートに取り付け、足で操作をして話しをします。電動車いすもジョイスティックを足で操作して動かしています。

携帯電話で話しをするときもトーキングエイドを使っています。

トーキングエイドで文章を打つのは少し時間がかかるので、電話のときはあらかじめ話しの内容を打っておき発信します。あとは、相手の人が「はい」「いいえ」で答えられるように聞きなおしてくれるので問題なく話すことができます。

携帯電話が使えるようになって良かったことは、

- ・「渋滞で送迎バスが遅れます」など、ちょっとした緊急連絡ができて便利。
- ・電話を使って、食事の時に家族を呼んだり、家族を起こしたりする役割ができて嬉しい。
- ・メールをする度に、パソコンをわざわざ立ち上げる必要がなくて便利。
- ・自分ひとりで友達や家族と約束ができるので便利。
- ・旅行先からメールが出来て嬉しい。

今では携帯電話がないと、とても困ります。先日的大雪（2011. 2. 14）の時、デイサービスの帰りの送迎バスが渋滞で遅れました。家に誰もいなかったなので、施設の職員から家族へは連絡が付きませんでした。私が自分で父の携帯電話に帰りが遅くなることを連絡しました。施設の職員は父の携帯電話の番号を知らなかつ

たので自分で連絡が取れてとても良かったです。

携帯電話で一番欲しい機能は、カメラで写真を撮りたいです。

今の携帯電話にもカメラは付いていますが、携帯電話のホルダにカメラが隠れてしまい、ひとりでは写真が撮れません。いつも介助する人に撮ってもらっているので、自分で写真が撮れると嬉しいです。

i P a d も使ってみたいです。今の携帯電話は、スイッチやマイクなど線がいっぱい出ていて壊れやすいので i P a d で電話・メールやトーキングエイドの両方の役割を一台で出来れば良いと思います。

今は友達から「twitterをしよう！」と誘われています。携帯電話で私でも簡単にtwitterができると楽しいと思います。

携帯電話が使えるようになったことで、自分自身で色んなことができるようになりました。これからも、私も使える携帯電話でもっともっと色んなことができるようになると嬉しいです。



（なお、本章は中野さんへのインタビューを基に中村が作成しました）

ロービジョン者に配慮した夜間歩行支援のための音と光を用いた歩行空間ユニバーサルデザインに関する研究報告

研究第一グループ 北川 博巳

1. ロービジョン者の夜間歩行の課題

現在、ロービジョン(LV：弱視)者は144万9000人いることや経済・社会損失も8兆8千億円との推計がされています¹⁾。その原因となる視覚機能の低下や疾患は人口の高齢化に伴って増加し、LV者に配慮した歩行環境整備は今後の課題です。

研究所の調査研究を通じて、LV者は1)昼間と比べ夜間の外出頻度は少なくなること、2)歩行の手がかりは周囲の音や誘導ブロックがあるが、夜間は街灯を頼りにしていることが分かり、夜間歩行に音と光は重要な手がかりです(図1)。

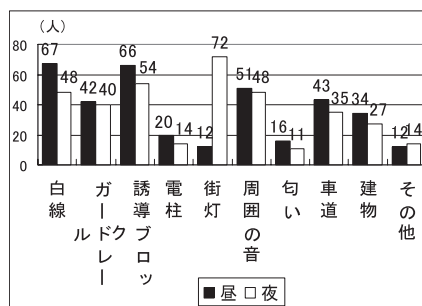


図1 LV者の夜間外出時の手がかり

他方、LEDの開発も近年盛んになり、LED照明も多く市場に出回るようになりました。研究所でもLED照明による歩行者誘導システムの提案や社会実験による検証を行ってきたのですが、この研究では、LV者に配慮した歩行環境整備の一つの手法として、光(LED照明)と音(平板スピーカー)を組み合わせ、音と光による移動支援システムとして提案しました。

2. 研究の概要および目的

この研究で提案したシステムは歩行者を誘導するためのLED照明(誘導鋲：キクテック製)、警告を示すための境界表示用のLED照明(境界表示灯：パナソニック電工製)、および平板スピーカーを用いたスピーカー内蔵警告ブロック(TOA製)を組み合わせています。

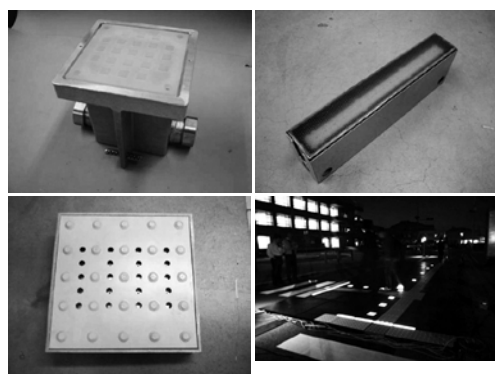


図2 誘導鋲(左上)、境界表示灯(右上)、スピーカー内蔵警告ブロック(左下)、組み合わせのイメージ(右下)



図3 検討会(調布市での社会実験)

このシステムは交差点内で導入したり(図2：当研究所での検証)、駅前広場

で導入したり(図3：調布市での社会実験)と、様々な場面で適用可能性があります。当研究所では各社と共同で、数年来LV者の意見も聞きながら、夜間歩行に有効な手段であることを検証しましたが、設置コストや必要な照明や音量についての課題もありました。この研究では、必要な照明の数や音量について、LV者の室内歩行実験によってその仕様を決めることを目標としました。この研究では財団法人国土技術研究センターの助成を受け、当研究所・キクテック・パナソニック電気・TOA・徳島大学との共同研究を行いました。

3. どのくらいの量が適切か—屋内実験を通しての検証—

LV者30人の協力を得て図4の実験を行いました。ポイントとして、暗い照度環境で①境界表示灯を何本点灯すれば発見できるか？また、表示灯で一旦停止して次に歩いても方向を維持できるか(オリエンテーションの確保)？②誘導鉈は離れた位置から2個以上連続的に見えるか？誘導に必要な個数は何個確保すればよいか(モビリティの確保)？③一定の騒音のある中で路面スピーカー(比較とし

て壁面スピーカー)の音の聞こえる範囲はどのくらいの距離か？音の内容はサイン音(盲導鈴の音)とアナウンスとどちらが聞き取りやすいか？あるいは好ましいか？について調査実験を行いました。

結果の概要ですが、

①視野損失の割合の高い人は停止後の歩行方向がややずれる人がいましたが、LEDの性能向上もあって、境界表示灯は全員が長さの変化や境界として認識ができました。よって人が立つことや何らかのトラブルを想定すると2～3台程度の設置が望ましいのではないかと判明しました。

②7m離れた場所から誘導鉈を5個設置(1.5m間隔)して歩行してもらいましたが、半分の方はすべて見える、ほとんどの方が3つ以上あればつながって見えるとの回答があり、誘導鉈も3台以上の設置が望ましいことがわかりました。

③正面から音を出す場合が、聞き取りやすいことがわかりました。しかし、路面から音が聞こえることは珍しく発見しやすいとの意見もあり、有効なことも確認できました。なお、路面から音を出す場合は音声よりもチャイムのほうが遠くまで聞こえることも判明しました。

この研究で、路面の活用は重要であることがわかりました。今後も路面サインの提案など新たな展開に結びつけられればと考えています。

1) 日本眼科医会：視覚障がいをもたらす社会損失額、8.8兆円!!,

http://www.gankaikai.or.jp/info/20091115_socialcost.pdf



図4 室内実験の様子

交通事業者向けバリアフリー教育訓練研修会(略称：BEST) (BEST:Barrier free Education System for Transportation)

当研究所では、一昨年より交通エコロジー・モビリティ財団との共催で、標記研修会を開催しており、今年度は、11月11日～12日の2日間にわたり、当研究所を会場に、関西地区のバス事業者を対象とした研修会を開催し、9社15名の受講がありました。

この研修会では、高齢者・障害者等の安全で円滑な公共交通機関の利用を実現し、障害者等の移動制約者への理解を深めることを目的に、交通事業従事者向けに接遇・介助の知識と技術を伝える研修を行なっています。研修の特色は、企画及び実施段階に障害当事者が参加することで、受講者と相互の理解を深めることができる点です。



図1 実技演習の様子

障害当事者が参加することで、単なるノウハウの習得ではなく、障害への

理解、コミュニケーションの取り方、ニーズに対する「気づき」の感覚を磨くことを重視しています。

当研究所に隣接する自立生活訓練センター自動車運転訓練コースでのバス車両を使つてのロールプレイによる実技では、「バス停でのお客様の確認」、「バス停から車両への乗降」、「車両内での着席や定位置での固定」等、バス停での介助の流れを想定した体験実習を通じて、乗降車時の必要に応じたコミュニケーションや、接遇介助の方法を学んでいただきました。



図2 車両への乗降演習の様子

研修の成果を、日常業務に活かしていただき、高齢者・障害者等への理解を深めて、公共交通機関の利用者の方々に望ましい対応を期待しています。

企画情報課 福山 澄子

施設への派遣研修を通して

「この方法、〇〇さんにどう？」

「え～、あの人は今までの方法でいいんじゃない？」

「ちょっと待って！私、分からへん！どうということ？！」

平成22年度から始めた『腰痛予防対策研修～ケアの見直しを通して～』では、普段の研修では聞かれないような受講生の本音が飛び交いました。通常の家介護・リハビリ研修センター課で行っている研修は、当センターが会場となり、応募して頂いた方が受講生となりますが、腰痛予防対策研修では応募して頂いた施設に私達が出向いて研修を行いました。

“腰痛予防”というキーワードで何を思い浮かべるでしょうか。近年、介護現場での腰痛は深刻な問題となっており、そのための対策も国を挙げて行われています。腰痛予防が大切であるとの意識は浸透してきたかに思えますが、そのためには単に福祉用具を導入するだけではなく、職員の意識を変えていく、ケア全体を見直していくというプロセスが必要となってくるため、思うように対策が進まない、どこから取り組んだらよいのか分からない、といった声も聞かれます。

昨年度行われた、特別養護老人ホーム万寿の家における「介助方法見直しプロジェクト」を踏まえ、家庭介護・リハビリ研修センター課での研修においても介護現場における腰痛予防について様々な活動を行ってきました。さらにこの活動を推進するために、より多くの職員に、

より現場に近いところで同じ思いを共有してもらいたいと考え、派遣研修という形の研修を始めました。

この研修では、限られた時間の中で、腰痛予防の考え方の講義、それを踏まえた介護技術の実習を行っています。人がどう動いているのかを考えながら介助を行うこと、お互いに介助の中で感じたことを述べること、福祉用具の特徴を捉えて使用するという意識を実習を行ってもらっています。私達が現場に出向くことで、自分達のホームで具体的な対象者を思い描きながら意見し合うことができます。また同じ講義を聞いていることにより、お互いに教え合うという場面も見られます。私達が気づかないような問題点や、思いつきもしない方法などが飛び出し、私達にとっても刺激となることがあります。



図1 施設内で行われた研修の様子

この研修により、施設のケアを考え、腰痛予防への意識が高まり、現場での介護の質が向上するきっかけになればと思います。

家庭介護・リハビリ研修センター課

藤本 道子

アシステック掲示板

コミュニケーションのバリアフリーを目指して 「コミュニケーションボード」

社会の中で私たちは、主に話し言葉によって自分の気持ちや状態を伝えながら生活しています。しかし、知的障害者や聴覚障害、言語障害のある人にとっては、その話し言葉によるコミュニケーションに困難を感じる場面が多くあります。また、このような不便は、日本を訪れている多くの外国人にとっても問題となっています。

そこで、話し言葉によるコミュニケーションにバリアのある人たちと周囲の人たちとの間をつなぐため、兵庫県では「コミュニケーションボード」を用意し、地域の様々な場所に設置することで、コミュニケーションのバリアフリーを目指しています。コミュニケーションボードには、伝えたい内容を表すイラストと、複数の言語での説明が書かれており、伝えたいことをお互いに指さすことでコミュニケーションをとることができます。当研究所は、コミュニケーションボードの制作に協力しています。

兵庫県版のコミュニケーションボードは、基本となるイラストを共通化したうえで、①総合庁舎本庁用、②総合庁舎県民局用、③単独事務所用、④文化施設用、⑤スポーツ施設用、⑥公園用、⑦キャンパス用、⑧病院用、の8種類を用意しています。さらに、それぞれの施設によって簡単にイラストを置き換えられるようにしています。また、それぞれのイラストには、日本語、英語、中国語、韓国語、ポルトガル語のことで説明が書かれています。

現在は、県関係施設（県庁舎、警察、県立高校を除く県立施設、病院）の総合窓口を設置するとともに、市町関係施設の窓口への設置も働きかけています。今後さらに、広く県内に広げていきたいと考えています。

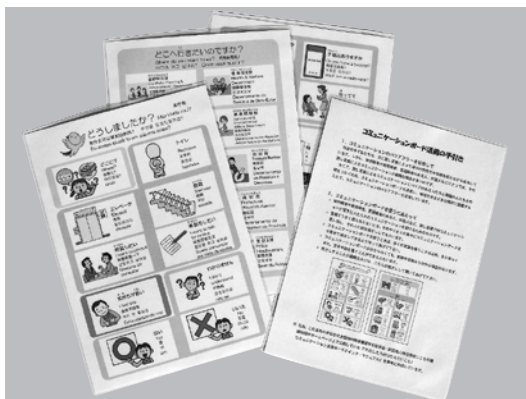


図1 コミュニケーションボード



図2 県庁1号館受付

アシステック通信

第62号 2011年(平成23年)3月
編集・発行
社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団
総合リハビリテーションセンター
兵庫県立福祉のまちづくり研究所
〒651-2181 神戸市西区曙町1070
TEL 078-927-2727(代) FAX 078-925-9284
<http://www.assistech.hwc.or.jp>

編集後記

春❀❀❀花の便りも聞かれる頃となりました。
ほとんどの携帯電話ユーザにとって、携帯電話は「なくてはならないもの」となっていますが、当研究所には未だ「携帯電話を持たない!」と頑張っている方もいます…
今回は、「障害者と携帯電話」と題して、聴覚障害者、視覚障害者、肢体不自由者の携帯電話利用を紹介しております。